
素直になれなくて

アンゴル・モア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になれなくて

【Zコード】

Z0845BA

【作者名】

アンゴル・モア

【あらすじ】

蘭と新一はトロピカルランドでデートをする予定だったが、高木刑事からの電話で行けなくなってしまった。

蘭は『事件だから仕方がない』と思いつつも、なかなか『素直』に為れなくて！？

めつまつせいかり（前書き）

新蘭ですーまだ始めたばかりなので、上手く書けませんが、

頑張ります！

せじまつせいかり

今日、私は新一と喧嘩をした

今日は新一と久しぶりに

トロピカルランドに行く予定だった

私は

ずっと楽しみにしていた

新一と一緒に居られると

思つてたのに

新一の携帯が鳴るまでは

プルルル

プルルル

新一の携帯が鳴った

(電話? 誰からだろう?...)

この時は

思いもしなかつた

まさか、

新一とトロピカルラングドに行けなくなるなんて

携帯のディスプレイを見て

新一は嫌な予感がした

もしかしたら

蘭とデートに行けなくなるかもしない

電話の相手は

高木刑事からだった

ピリ

『はい。工藤です』

『あつ工藤君？高木だけど実は…』

高木刑事の言ひづらそうな声がした

高木刑事は一人がトロピカルで

デートすることを知っているからだ

(高木刑事? また事件かな?)

高木刑事から電話という事は

もしかしたら、新一と

トロピカルランドに行けなくなるかもしけない…

いや、今日きっと行けないだろう

蘭は

ただ

俯いて

悲しく

笑つ
ていた

せつめつけいから（後書き）

感想・ご意見

何でも書いて下さこーーー。

わがまま（前書き）

蘭の気持ち

わがまま

『はい』

『わかりました！ いえ、大丈夫です！ また今度行きますから…』

グサツ…

蘭は心に何かが刺さったのが
わかつた

そつか…

仕方がないよね…？

新一は

『探偵』なんだし…

ズキン…

何時呼ばれても…

ズキン…

おかしくないよね

ズキン…

あ…れ?

何でだろ?つ?

心では

分かつてゐはずなの[.]

何で涙が流れて来るんだろう[.]

『蘭』

『わりい』

『行けなくなつちま...蘭?』

グズ...

グズ...

駄目...

泣こひや...

ほり、

蘭!あなたのせいいで

新一が

困つてゐるじゃない！

だが

涙は

止まるどころか、

溢れて来る

事件さえ起きなければ、

新一と一緒に居られたのに

『蘭？』

『……』

大つ嫌い！！

事件なんて……

事件のバカつ！！

『新一のバカ！！』

『？』

『新一の』

気がついたら

素直になれない

私の心は

『新一のせいじやないから気にしないで…』
つて言いたいのに…

『事件だから、仕方がないよ…』とか

本当は

こんな事が言いたいんじゃない…

本当は

(違う…)

私は

パアアアン…

新一の頬にビンタしていた

『！？』

新一は

叩かれた左の頬に手を当てながら

呆然とした表情で

蘭を見た

『ら、ん…』

新一の頬は叩かれた衝撃で

赤く膨れています

わがまま（後書き）

感想・ご意見

お待ちしております！

感情の発達と表現（記述文）

続ხ գրահանում է այս պատճենի վեհականությունը և առաջարկությունը հաջախառնելու համար:

感情の念のままに

『…蘭？』

新一は
戸惑いを
隠せないでいた

蘭が

自分の頬を叩くとは
思わなかつたからだ。

『新一は』

私なんかより…。

事件の方が大事…何でしょー…?』

駄目…こんなこと

言いたくないのに…

心では思つていないとが口から出でてくる

『なつ…?』

突然

蘭が言つた発言に

新一は
思わず
声を出した

『グズ…グズ』

蘭は泣いていた。

『バカ！！』

『んなわけねえーだろ！？』

『俺は事件なんかより、蘭の方が大事に決まつてんだろ！』

『だから…』

『そんな顔…すんなよ』

『…』

『新一』

『どうせ私を置いて、事件に行くんでしょ？』

新一は

困った表情をしていた

『仕方ねえーだろ！！』

事件が俺を呼んでんだからわ…』

俺は言い訳をした

：蘭の気持ちも知らずに

後で後悔することになるとも知らずに…

『あらそつ』

『新一は私より、事件の方が大事なのね？』

蘭の顔がピクピクしていた

『あ…だから今のはそりゅう意味じゃなくて…』

違うんだ！蘭！！

俺はお前か

何よりも大事で

世界一大切な存在なんだっ！！

…何て

言えたら、どんなに楽か…

『えっと…だから…その…だな…』

『ひいひー

『ひづり

……

『へ?

『新一なんて……』

『新一なんて……』

『お、おい』

『蘭?』新一は慌てた

何とか

蘭を落ち着かせよつと
考えたが
できなかつた

蘭の言葉によつて……

『もひづらなーい!—!

そういうと蘭は
勢いよくドアを開け

出て行ってしまった

俺は必死になつて呼び止めようとした

『蘭！らーあん！！』

だか

蘭は振り向かずに

走つて行つてしまつた

……新一の……新一のバカっ！ハア
ハア……

『そんなに事件が好きなら事件といれば良いじゃない！？』

。

『……大バカ推理之介』

(どうしてあんなこと……言ひちやつたんだろう)
あんなことが
言ひたかつた訳じや
なかつたのに……。

)

：新一を困らせてしまった。

（新一、傷ついたよね…）

今更

後悔しても、遅いのに…。

私は

ただ…

新一と一緒に居たかっただけなのに…

『「めんなさい…』

新一…』

わがままな

私を…

許してくれなんて

言わない。

私は、貴方を傷つけてしまったから。

感情の念づまに

どうして私は、『素直』
になれないんだろう…？

新一に名前を呼ばれた時、振り向けば、良かつたのかな…。

そうすれば
「こんな」とにはならなかつた?
(.....新一)

………
…逢いたいよ。

感情の念のままに（後書き）

感想・ご意見

お待ちしております！

～あなたに逢いたくて～

あの後、新一と別れた私は…。

自分の住んでいる家、

「毛利探偵事務所」に向かっていた。

(新一
今頃、
どうしてるのかな?)

…事件は、どうなったのかな?

解決したのだろうか…。

頭に入つて来るのは、「新一」の事ばかり……。

彼が、私の頭の中を支配している。

逆に言えば、彼の事しか、

頭に入つて来ない…

私の世界は、

全て「彼」で出来ているのだろうか？

…。

いや、「新一」で出来ていると叫つても、過言じやないのかもしれない。

私の世界は、「新一」で出来ている。

……出来週れじるヒリヒレのモード……。

貴方が居ない世界は、「世界」

じゃない……。

貴方が居なければ

私の世界は、失つてしまつものが多い。

だつて、貴方が居ない世界は、色が失くなつてしまつから

。

もし、あなたが私を許してくれるなら.....、

私はあなたに遇いたい。

もう一度、笑顔で私に逢ってくれますか？

私は貴方に遇いたいです。

新一
…。

「毛利探偵事務所」に着いていた。
気がついたら蘭は

『……ただいま……』

何気なく言つてみた口業。

事務所に入ると、父親である毛利小五郎が、

沖野三一のベートオを鑑賞しながら、お酒をぐいぐい飲んで酔っ払っていた。

『πーπーπーπー』

『ニヤ～。やっぱ、πーπがやんの歌声はかっこいいなあ～～！』

すっかり、ピートの決闘πーπで夢中になってしまった。

それにしても、この歳でアイドルのファンとは、良いのか悪いのか。

『何言つてんだよ？作者！良いに決まつてんだろ？』

なあー三一七ひやーん

』

(ああ、そうですか…)

『ひつぐらりあんちゅわーん

お帰り～』

酔っ払った小五郎が何とも言えない声で言つた。

ビールの空き缶がそこいら辺に散らばっている。

一体、どれくらい飲んだのだろうか…？

…ビールの缶が、1、2、3、…。

すでに、4缶も飲んでる。

今は、6缶を飲もうとしている所だった。

「つまの闇な、『モー…』こんな散らかして…』

『お父さん…飲み物…だから、お母さんが出でこねやう

!—『

と、父・小五郎を叱つて いるのだが、

今の蘭は元氣がない為、

小五郎を叱る 気力すら残つてはいなかつた。

『...蘭?』

小五郎も娘に違和感を感じたのか、真面目な顔つきになつた。

『おい、蘭：
何かあつたのか？』

『「ハハんー何でもないよ、お父さんーー』

蘭は何とか「まかそう」としたが、父の前ではそれが叶わなかつた。

『蘭……お前、あの探偵坊主と何か合つたろ?』

それまで、酔っ払っていた小五郎が嘘のよひに当つた。

『……』

何もかも見透かすような目。

まるで、すべて「お見通し」と言つてこらるかのような瞳で。

～あなたに逢いたくて～（後書き）

『ハア…。小説、難しいよお～（泣）』

『…文才がないせに、趣味で書い「つとあるか、ひいつなるんだよー。』

『だつてえ～（泣）』

『そんなことより、

（そ・ん・な・事、よりー～）

『何なんだよー。』のストーリーはつー。』

『ああ…。心配せんでもええで？

ちやとハッペー・ハンド【かわいい】

安心しー！！なつ？

』

『そういう問題じゃねーよバーロー..』

（何で関西弁何だ？）

それでは、また次回も頑張ります！

『あつ、ひじりー逃げるな作者ー！』

アンゴル・モア

～あなたに逢いたくて～その2「涙」（前書き）

駄目文、よく分からぬストーリーですが。

それでも読んでくださつたら、嬉しいです！

～あなたに逢いたくて～～その2「涙」

『蘭……お前、あの探偵坊主と何かあつたんだ？』

『……』

一つもの小五郎とは違ひ、

真剣な表情。

「まかしきれないと考えた蘭は、

すべてを父親の小五郎に話すことにしてしまった。

『……お父さんの話へ通つだよ。』

『さうがちつかひか……。』

『お父さん……。私ね、新一に酷いことをしたかったの……。』

涙を見られたくないため俯いて話した。

『蘭。今日起こつたこと話
せ。』

俺が全部受け止めてやるからよ。』

父の言葉に甘えて

蘭は小五郎に抱き着き、

思いっきり泣いた。

『うへ……うへ……』。

』

』

『お父さん……グズ……あの……ね、グズ……グズ……。

私つ……、新……一に……グズ……酷い」と……グズ……言つちやつ……たの……！

私……、新……グズ……一を傷つけたの……。

蘭は、新一との出来事を全て話した。

泣きながら、話す娘に小五郎はただ優しく、

『えりか……、そうか……。』

と、

頷きながら蘭の背中を優しく摩つた。

蘭が泣いてから1時間後

蘭はよつやく落ち着きを取り戻した。

『もう大丈夫か、蘭？』

心配そうに小五郎が聞くと、

笑顔で蘭は返事をした。

『うん…もう大丈夫！

お父さんのお陰よーー!』

『そりか…よかつた。』

安心したのか、小五郎はほっとため息をした。

『蘭……あの探偵坊主と仲直りしないのか?』

『……』

小五郎の発言に困ったのか、蘭は俯いている。

『いい、のかな…』

『ん? 何がだ?..』

『……私が、新一に遇いに行つていののかな……？』

『馬鹿……そんなの、良しに決まつてんだらうがつー』

『あの探偵坊主が蘭に逢いたくねえーなんて言つたら、俺が直接行つて、

『蘭の前に立たずつ出してやるわーーーー』

『お父さんは……』

『……いいか？蘭。

今のはひに謝つとかないと、

そのうち後悔する」とになるかもしけねーんだぞ？

『

『.....』

『蘭……お前は、後悔したいのか？すっと氣まずこ今までいいのか？

べつだ.....。

『

『
…
』

蘭は考えた。

(私は…、)

蘭は新一の顔を思い浮かべていた。

「蘭！」

私は
…

蘭は決心した。

『嫌だー。』

『IJのまま新一と氣まずいままなんて…嫌つーー。』

小五郎の表情が微笑んだ。

『蘭ならうとう言つて、思つたよ。』

蘭も父を見て微笑んだ。

『お父さん…。』

『

『何だ、蘭？』

』

蘭はクスッと笑った。

『なに笑つてんだ？』

わざわざまで泣いていたと思ったたら、突然笑う娘

小五郎は不思議に思い蘭を見た。

『あつがとつーお父さんーー。』

娘のお礼の言葉に、小五郎は照れながら、

『うむせえ……』と素つ氣なく返事した。

父の素つ氣ない返事に、

娘の蘭は笑つた。

『ぐすくす……』

『ああ？ 何が可笑しいんだよ……。』

『だつて、ふふ……。』

『ふふふ……。』

あはは、
はは

『お父さんは一素直じゃないんだから……』

(.....)

やつと元気になつたな。
蘭：

温かい眼差しで、小五郎は呟いた。

時
刻
は
7
時。

小五郎は、『そろそろ腹減ったなあ…』。

蘭！早く飯作ってくれー！

『

と、お腹の鳴る音を聞きながら言つた。

蘭はキッチンに行き、夕飯の支度を始めた。

『はいはーー今支度するから、待つてーーー!』

そして、夕飯を食べ終え…

蘭達は布団に入ると、眠りに就いた。

～あなたに逢いたくて～～その2「涙」（後書き）

うーん…意味 不明？

感想お待ちしています。

～あなたに逢いたくて～～その③「園子の仲直りラララ大作戦」前編（前書き

更新

（一部修正しました。）

～あなたに逢いたくて～～その③「園子の仲直りラララ大作戦」前編

ここは「帝丹高校」

時刻、7：30分。

学校の教室には、すでに生徒がちらほら居て、

お喋りをしている者も居れば、

本を読んでいる人も居る。

蘭が教室に入ると、新一はまだ来ては居なかつた。

…もしかしたら今日は、事件で来れないのかもしれない…

…どんな顔で新一に逢えれば良いんだろ？…

「昨日は、『めんなれ』」
とか

「私っ、言い過ぎた。新一の気持ちも考へないでっー。」

…とか言つて、新一に謝ればいいのかな？

(…………わからぬいよつ…)

（私がやつて新一と仲直りすればいいのっー。）

蘭が重い悩んでいると、教室のドアがガララッと開き、

見慣れた茶髪の少女が元気よく入って来た。

『うーん…おつかれ…。』

茶髪の少女園子は、蘭に元気良く挨拶をした。

『ねえよ、園子…。』

『やつこねば、昨日せひ那じだつたのへ』

「やつこして園子は蘭ひた。

『・・・新一の事へ、新一の事へ』

できるだけ、

昨日の出来事を園子に話したくなかった。

惚けた表情で「まかすよ」って元気いっぱい蘭。

だか、さすが園子といったところだらうか……。

蘭の嘘を一瞬で見破った。

『蘭：昨日、新一君と何かあつたんでしょ？』

『一、二、

それまで……。

。 。 。 うるさいやつは、ちびの隣となりで、うるさい。

「おまえも避けたかった。

親友の園子に、迷惑を掛けたくないからだ。

(蘭……。

あんたって子は

……私たち、親友じゃない。)

どうやら、蘭の考えている事がわかつたらしい。

『「まかせたって、無駄よ……』

蘭の考へてることなんて……全部、お見通しなんだからね……』

『……園子。』

……
駄目だ。

やつぱつ園子……、『まかしは効かない……』。

：私だって、本当は『まかしたり、嘘突くのは嫌だ。

『園子…実はね、昨日……。』

蘭は昨日、何があつたかのか、園子にも話した。

『……つて事があつたんだ。
昨日……。』

『……』

『ねえ……。』

園子……、私どひやつて新一に謝れば……

『

バンッ……。

蘭が話し終える前に、園子が蘭の机を思いつつきり叩いた。

教室にいる生徒全員が、ビクッとして驚いている。

皆、一齊に園子を見た。

『…………何で……？』

『えつ……』

シーンと静まり返った教室。

蘭と園子の声がやけに大きく、響いた。

『何でそんな大事なこと、
もつとはやく言わないのよつー?』

『…』

園子の言葉に、蘭はしばらく黙った後、

重い口をようやく開いて、
答えた。

『…………ゴメンね。園子…………。』

『…………んじやない…………。』

『?』

…………。』

みんなは睡を飲んだ。

園子はいつたい、何を言おうとしているのだろつか…。

『私は蘭に謝つてほしいんじゃなー…!!

…私はねえ……。

蘭にもつと早く言つて欲しかったのよー…?』

『園子。』

『園子。』

『……ねえ？』

蘭。

私達、親友じやない！

『それとも、この園子様が信用できなって言ひのー?』

『違つよ、園子。』

別に園子が信用出来ないとか、そんなんじゃないよ……』

蘭は、首を横に振った。

『いやあ、いいで……？』

園子は瞳を潤め、蘭に聞いた。

『迷惑、掛けたくなかったからー。』

『園子に迷惑掛けたくなかつたから、言えなかつたの』。

園子には……言いたくなかったの。

新一との事。

『

『バカね……』

『ば、馬鹿？』

園子の発言に、驚く蘭を余所に、

園子は続けて言った。

『さつきも言つたけど、
私達、親友なのよ？』

『園子。』

蘭は眼を見開いた。

『水臭いわね。』

迷惑掛けたくない?

あのね!蘭。

私にひとつは、言わないより、
ちやんと言つてくれないほうが迷惑なのよーー?.

『

『…助っこりやや、辛こじを語つて助け合ひのが、親友じやな
いの…!

私はいつだって蘭の味方なんだから、心のなかに歎みを溜め込もう
としげや駄目！

……蘭、今から園子様に隠し事はNGよ？

私、蘭に對して迷惑なんて思わないからっ！』

(園子…)

『ありがとう。園子！

… そうだよね。私達、親友だもんね。

困ったときは、お互い様よね。

私が大切なこと忘れてた。
園子のお陰で、思い出したよー。
ありがとう、園子。』

『まーね。

でも、よかつた。蘭が新一君とのこと話してくれて…。

このまま問題放置してたら、ずっとギクシャクしたままだったかも
しれないし、

万一、

新一君と蘭が別れるなんて事になつたら…。

まあその前に、

あの男が蘭と別れるなんて」と、絶対しないと思ひけどね。

『

『… そう、かな?』

『そうよ。絶対!

何てつたつて、新一君は蘭に夢中なんだから! -

、 一途なあいつが、 蘭以外の女を好きになるなんて事

天と地がひっくり返つてもないから。』

『もっ……。園子つた。

』

『あの……お取り混み中申し訳ないけど、そろそろホームルーム始め

……』

そんな担任の声を遮るよつて園子は言つた。

『それより、蘭！

新一君と仲直りしたいんでしょ？』

『う、うう。』

（先生困つてゐるナビ、良こののかな…。）

『それなら、良この考えがあるわよつー。』

ウインクして園子は言った。

『それって？』

何だ？…。良い考えつて。

『名付けて……』

『？』

『蘭と新一君！仲直りラブラブ大作戦よつ！』

『なつ、仲直りラブラブ大作戦ーー！？』

園子のことだから、何を言うのか、多少覚悟していたけど……

な、何を考えてるのかな？園子……。

いろんな意味で、不安になつた蘭。

一体、どんな作戦なのだろうか？

誰もが気になつて、もはやホームルーム所じゃない。

『うつしょくも出来ず』この担任の先生は、ため息をした。

『そりゃ。まずは、一人が仲直りするきっかけを作るの。

白馬に乗った王子、新一君が姫、蘭の元へ謝りに来るのよ…。

『

『…あのっ、園子?』

意味が解らない蘭は、焦っている。

（回想）

「姫……。

昨日は、姫との約束を果たせず、申し訳ありませんでした……。」

「どうか、私の『無礼』をお許しください。」

「……嫌よつて……嘘つか……」

……私、

ずっと貴方との約束を楽しみにしてましたのに……。

「うう……うう……。」

『……そ、園子おーー!?』

蘭は顔を赤くして、必死に園子の演技を止めようとするが…、

園子に蘭の声は届かなかつた。

完全に一人一役を演じている…。

「うなつた彼女を止められるものは、誰ひとり居ない。

「本当に申し訳ありません。」

姫。
。

許してくれとは言こません。

ですが、姫。

そんなお顔をしては、せつかくかわいい姫が立なしちゃよ……？

「……王子／／／／。」

「では、私は城へ戻ります。

姫も早くお城へお戻りください。

この辺は、物騒です。姫にもしものことが合つたら、大変ですから…

「

「姫…さよなら。」

「

「待つて。王子……！」

「！？」

「姫／＼／

蘭姫は王子の頬にそっと、口づけをした。

「私が悪いのっ…。

…だから、行かないで…！」

王子…。

「

「姫…」

「王妃…」

『やして一人は、深い口づけをかわし、

見事仲を取り戻したのです……。』

『はあ……。めでたしめでたし。』

よつやく話しあ終えた園子。

やつと自分の世界から、帰ってきたようだ。

『何がめでたし、めでたしそう……』

頬を赤らめて怒る蘭。

だが、園子はお構いなしに笑つて蘭に言った。

『そんなに怒らないの？！

冗談よ、冗談。

嘘に決まつてんでしょう？

もしかして、本気にしてたの？蘭？

『

どうやら、園子は蘭をからかっていたらしい。

その詫問に、ニヤニヤしている。

『ちつ、違うわよ／＼＼＼＼

何で私があんな奴と……。

』

ガラッ…

蘭が何かを言おうとしたその時、

教室のドアが開き、先生が入って來た。

…さつきの先生は、職員室に行つたらしい。

『皆席に座れ！授業はじめるぞーーー。』

生徒全員は、『ええーーーーー』と不満の声をあげ渋々席についた。

～あなたに逢いたくて～～その③「園子の仲直りララブ大作戦」前編（後書き）

感想・お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0845ba/>

素直になれなくて

2012年1月10日20時50分発行